

令和3年度群馬県水産試験場成果発表会

会場：ビジターセンター（県庁舎2階）

13:05～13:20	1 戻し交配による新たなアユ系統の作出 水産試験場 生産技術係 松原 利光
課題要旨	江戸川系は冷水病耐性の高い系統であるが、継代数の増加により種苗性の低下が懸念されている。そこで、江戸川を遡上してきた個体と江戸川系で戻し交配を行い、新たなアユ系統を作出したので、その経緯と状況について報告する。
13:20～13:35	2 天然遡上アユと江戸川系継代アユとの冷水病耐性比較 水産試験場 水産環境係 阿久津 崇
課題要旨	天然遡上アユと江戸川系継代アユ（F10）に対し、冷水病の原因菌 <i>Flavobacterium psychrophilum</i> を用いた人為感染実験を実施して、両系統間で冷水病耐性を比較したので報告する。
13:35～13:50	3 外部形態による釣獲アユの由来判別 水産試験場 水産環境係 新井 肇
課題要旨	天然アユの遡上河川では釣り師の間で釣獲アユの由来が「天然遡上魚」であるか、放流された「人工種苗」であるか度々話題になる。そこで、釣獲アユの外部形態を計測して由来を判別したので報告する。
13:50～14:05	4 アユの急冷ヒートショック反応 水産試験場 生産技術係 井下 眞
課題要旨	アユの放流時において、輸送時の水温より河川水温が低い場合もあり、水温差による放流種苗への生理的な影響が懸念される。そこで、急激な水温低下がアユに与える影響を確認したので報告する。
14:05～14:20	5 ビニル袋による活魚の輸送条件 水産試験場 川場養魚センター 田中 英樹
課題要旨	小規模で活魚輸送する際、ビニル袋に酸素封入する方法を多用するが、輸送可能な魚の量や時間などは経験に頼る場合が多い。今回、アユを酸素封入したビニル袋により自動車で輸送し、遊泳行動や溶存酸素量から輸送条件を評価したので報告する。
14:20～14:35	6 代理親魚技術を用いたアユにおける系統保存方法の開発 水産試験場 水産環境係 鈴木 究真
課題要旨	水産試験場では東京海洋大学との共同研究により、凍結保存した生殖細胞を移植した代理親魚を用いること（代理親魚技術）で、アユの系統を保存する方法の開発に取り組んでいる。今回は、代理親魚技術の解説および研究の進捗状況について報告する。
〈 休憩 〉 14:35～14:50	
14:50～15:05	7 県内水産業におけるデジタル化・DX導入の可能性 蚕糸園芸課 水産係 渡辺 峻
課題要旨	本県は「今後3年間で日本最先端クラスのデジタル県を目指す」という目標を掲げている。そこで、本県水産業のDX導入の可能性を探るとともに、県内水産関係者が比較的取り組みやすいデジタル化やDXについて具体的事例を交えて説明する。
15:05～15:20	8 ギンヒカリ早期成熟対策について 水産試験場 川場養魚センター 神澤 裕平
課題要旨	ギンヒカリは3年で初めて成熟する個体を選抜育種したニジマスであるが、飼育条件等によっては、2年で成熟することに伴う生産ロスが問題となっている。そこで、2年目で成熟するサイズの確認や更なる成熟遅延系の選抜を行ったので報告する。
15:20～15:35	9 群馬のサーモン 過去・現在・未来 水産試験場 主席研究員 小西 浩司
課題要旨	群馬のサーモン「ギンヒカリ」が登場して20年が経過した。ギンヒカリのこれまでを振り返るとともに、これから群馬の養鱒業がさらに発展していくために何をすればいいのかを考えてみたい。